

새로운 시대 新文化運動と哲学

地球村時代を生きている私たち人類は、コロナ19以後、新しい時代を切り開くための新しい暮らしの精神と文化、そして新しい生命哲学の必要性が急がれている。

人類が経験した伝染病のような大流行の疾病に関する深層的な分析とその原因を探って見ると、人間の間違った哲学と精神文化に起因するのがほとんどだ。筆者が研究してみた結果によると、大流行の伝染病や疾病が蔓延していた時期は、必ず互いに憎み合い、殺し合いをする「殺生文化」が多くの人間の心の中に蔓延した時に起こり、また過度で無分別な人間の利己的欲望と物質的享楽生活のための無慈悲的な自然生態系破壊と環境害損に起因する場合が多いことが明らかになった。その全ての結果は、人間の間違った価値観と未開の哲学に基附く思考方式、そして生命を軽視する文化から始まったものだと私は思う。もはや私たちは、これからは旧時代の弊習と文化を徹底的に投げ捨て、新しい時代に向けて新しい人生を生きていかなければならない転換点に立っている。それでは、新時代とはどんな時代を意味し、どのように渡来するのか先ず探ってみよう。

新人類時代

新しい時代とは、衰退して病み死んでいく地球村の生命を生かし、万物と生態系とともに ' 相生共存 ' しようとする心の時代であり、生命を尊像する時代である。すなわち「Hanaism(一家)」と「一体=한몸(ハンモオム),One Body)」哲学を実践する新しい心を持った未来人類である「新人類」の時代を指す。天人のような神人類時代は排他主義的な考え方と集団利己主義に陥って互いに憎みながら殺し合いを為てきた死の「殺生文化」を消滅して、互いに助け合って隣人を愛することを我か兄弟と自分の身のように大切にする正しい精神と心に生まれ変わった新しい人間達が住む

世界、すなわち生命と愛が充滿して心温まる大同の太平時代を言う。そのような時代はコロナ19が終わる同時に將に全人類の目の前に当り来るだろう。

数千年前から数多くの先知者達と預言者が予告してきたその新時代と新文化運動は、20世紀後半から韓国で始まり、朝鮮半島を越えて世界各地で漸進的に起きている。このような新人類が出現して生命を生かす文化を、筆者は「生生文化」または「永生文化」と呼ぶことにする。上にも述べたように、もはや人類が共滅危機への道の末から共存共栄の道を模索しなければならぬ岐路に立たされている。今の人類は、新しい心と更生した人間になって新時代を切り開かなければならないという使命感と時代精神が切実に必要であろう。このような新しい文化を創り出すためには、新たな価値観に立脚した新人類哲学が必要であり、又、死んでいく生命を生かせる新学問の出現は必須的要素である。

近い将来、人類が必ず学ぶべき新学問とは、まさに永遠な生命の海に導ける「生生文化」である「不老長生学」あるいは「永生学」になると見通すことができる。そして実践すべき新しい哲学とは、間違いなく新人類が主張している " 誰でも我がの身のように亦は自分と一つの体のように思う "、「一体(ハンモオム)哲学」に注目し、此は新時代を切り開くことができる代案的哲学になるだろうと同感する。筆者は世界新宗教運動の研究と人類の未来を研究する未来学者として、数十年間の韓国新人類文化の研究と哲学研究を通して、現世人類が直面している諸懸案問題と危機から抜け出す代案を 新人類の新文化と「人類が一つになる生命を生かし救う新文化運動」から見出した。

今号から連載される記事原稿の内容

は、1987年度後半にハンサンヨン様が韓国ソウルで出版した永遠の生命に関する新学問、「永生学」を参考にし、抜粋して纏めたものである。それでは、まず、ハンセンヨン氏の著書の序文を通して新時代の意味と新学問に関して探ってみよう。

序文

いま、巨大な宇宙の二つの波動がぶつかって、一つになり、新しい第三の宇宙が生成されつつある。東洋の精神文明と西洋の物質文明がぶつかり合いな栄の道を模索しなければならぬ岐路に立たされている。今の人類は、新しい波が誕生しつつある。それは、波動というより、生命の光である。新しい世界、新天地を開く明るい光なのである。

無知の日陰に累積していた新天地の舞台は、遮っていたカーテンを引き裂きながら、隠されていた燦然たる光線が眩しく輝きだした。

見よ！あなたの眼で確かめて見よ！老いたる肉体が若返り、死につつあった人生が永遠に生き続け、病気をすることもなくなった。

このような驚くべき不死永生の奇蹟が、いま現実起きているのである。この新しい夜明けを告げる主人公たちの胸中には、善なる良心が花開き、かれらの手足からは忘れ去った若さが再び蘇生している。

この偉大な事実の前では、人類の凡ての歴史と、人間どもの凡ての学問は暫し終息せねばならない。そして、この新しい歴史の鼓動に耳を傾けなければならない。

いま、凡ゆる宗教、凡ゆる学問では、この時点から新しく生まれ変わらなければならない。

この眩しく輝く、永遠の生命の光の

前で！

生命の天光

元来、人間は永遠に生きることのできる存在であった。人間が死ぬのはその精神が間違って狂っているからであり、その狂っている精神を治せば人間は死なない存在に変わるようになるものだ。

なぜなら、人間の中には基になる本性の神が内在されており、元来、人間自体が神であったからである。

“はじめに生命である神があった。み言葉は神と共にあった。。。そしてこの命は人の光であった”(ヨハネによる福音書1の1～4節)

ヨハネ福音書にあるこの有名な文句からわかる通り、神はみ言葉であり生命である。従って、神とみ言葉が別にあるのではなく、神の言が即ち神であり、神が即ち生命であるのだ。われわれ人間が生きてることのできる生命エネルギーそれ自体が即ち神であるのだ。故に、生きている人生は凡て神の言で生きているのである。このことを証明する聖書の句は余りにも多いので列举するのも煩わしいほどである。

このように最も聖書的な観点からみて、神は“死ぬ者の神”ではなく、“生きている生命”自体が正に神である。それにも関わらず、現在人々達は神様を死後、霊界において会う閻魔王の如き存在だとしているから困ったものと言わざるを得ない。

神と人間は同質性の存在である。水と水が合って一つになる如く、神と人間は一見、異質のものと思いがちだが、合って一つになることができる同質性の存在である。

聖書で、“神は自分のかたちに人を創造された”(創世記1 - 7)と言っているように、人間は神と同じような本質を持っており、人間を指して神の子、神の

息子と言っているから、人間と神は父と子の関係と同じである。故に、神の子が神になることは当然であり、動物になることはあり得ないのである。

神は空中や地の底にあるのではなく、人間の中にいますことを聖書も明らかにしているのだ。

“あなたがうち働きかけて、その願いを起こさせ、かつ実現に至らせるのは神であって…”(ピリピ人への手紙2)

“あなたの神、主はあなたのうちにいまし、…”(ゼバニヤ書3 - 7)

“わたしたちの内に宿っている聖霊によって守りなさい。”(テモテへの第二の手紙1 - 4)

このように、人間が即ち神であり、人間の中にいますかたが神である。にも拘らず、世の人々は神が天の空中にいて見えない存在だと言っている。そういうことで、かれらは書や天に向かい祈り、見えない存在に向かって願い事をならべているのである。だが、人に向かっては祈らないのだ。そして、自分自身の中に神がおり、また、悪魔も自分の心の中に存在しているという事実を知らずにいるのである。

「人間の肉体が死なない！」だれでもこの言葉には、まず疑問をもつことだろう。

それは至極、当然であろう。現に凡ての人が老いつつ、そして死んでいくからである。

しかし、だれかが老いと死に対する根本的な原因を究明し、その原因を除去することができれば既存の常識では想像すらできないだろうが、それは可能なことなのである。

ちょっときいただけでは、それは不可能な仮説にすぎないと思うことだろうが、いまあなたが手にしているこの本は、人間が死を忘れ、永遠に若さと喜悦のなかで暮らすことのできる秘訣を伝授するためのものなのであろう。

これは決して、仮想玄室的な理論で

はない。多くの人々が死の苦しみを戦い抜き、「死」そのものを克服した偉大な体験の記録であるからである。ある二、三人の素朴な信仰の結果を言うのではない、数多くの証拠と証人がおり、しかも科学的に充分な確証を得たうえに、この本が陽の目をみたのである。

いま、この「永生学」をいう純粋な学問によって、多くの老人が十年以上も若返るといふ、驚くべき現実が起きている。この新しい「生」への方法を実践する人々は、年齢を逆にとっているということである。

過ぐる七年間、この本の内容(自由律法)を実践する数千名の人が、白髪が黒髪に、閉経十余年の老婆たちのメンス(月経)が再生するなど、奇蹟ともいえる現象が普遍的に現れている。しかも、このような神秘的な出来事が合理的に、秩序整然とした方法で行われているのである。

とくに驚くべきことは、これらの現象が、古今東西の各種の経典、また、予言書に提示されている内容と、あまりにも正確に符合しており、いままで解けなかった数々の謎と疑問が容易に解明されることである。

この、世にも不思議な真理を、どのように説明したら理解してもらえるだろうか？いささか気がかりである。

そこで、できるだけ客観的に納得のいく事実、否定しようにも否定できない科学的な事実を、理解しやすいように述べたつもりである。だが、この本を読み進めるうち、読者の関心は恐らく肉に関することよりも心に関し、物質に関することよりも精神に関し、その価値を見出すようになるだろう。

そして、結局には霊と肉とが別個のものではなく一つのものであり、万物は凡て神性をもっているということ悟るようになるだろう。そうなれば読者の皆さんは、すでに「永生学」の第一歩を踏み出したことになるのである。

一九八七年八月一八日　ハンサンヨンより*

Subaru Kan / 新人類文化研究所長

격암유록 新 해설 제105회

桃符神人 도부신인

弓弓乙乙修道人궁궁을을수도인이 運去運來循還也 운가운래순환야니 天鷄龍 천계룡을 先覺後 선각후에 地鷄龍 지계룡은 再尋處 재심처라 天十勝 천십승을 先覺後선각후에 地十勝 지십승은 再尋地 재심지 天兩白 천양백을 先覺後 선각후에 地兩白 지양백은 後尋處 후심처라 天三豊 천삼풍을 先覺後 선각후에 地三豊 지삼풍은 後尋處 후심처 天弓弓 천궁궁을 先覺後 선각후에 地弓弓 지궁궁은 後尋處 후심처 天理田田先覺後 천리전전선각후에 地田田 지전전은 後尋處 후심처 天石井 천석정은 先覺後 선각후에 地石井 지석정은 後尋處 후심처요

궁궁을을의 십승지도(十勝之道)를 닦는 사람이야. 운이 가고 오며 순환함에 따라 지귀(地鬼)의 운이 가고 천신(天神)의 운이 오느니 선후천이 가고 중천의 운이 오게 되느니라. 하늘의 계룡을 먼저 깨달은 후에 땅의 계룡을 다시 찾고 하늘의 십승을 먼저 깨달은 후 땅의 십승을 다시 찾

마귀는 흑십자요 하나님은 백십자이니라

으시오. 하늘의 양백(兩白)을 먼저 깨달은 후에 땅의 양백은 뒤에 찾을 것이요. 하늘의 삼풍(三豊)을 먼저 깨달은 후에 땅의 삼풍은 뒤에 찾을 것이요. 하늘의 궁궁을 먼저 깨달은 후에 땅의 궁궁은 뒤에 찾을 것이요. 하늘의 이치인 전전(田田)을 먼저 깨달은 후에 땅의 전전은 뒤에 찾을 것이요. 하늘의 석정(石井)을 먼저 깨달은 후에 땅의 석정은 뒤에 찾을 것이요.

天耕農 천경농은 先作後 선작후에 地耕農 지경농을 後作 후작하라 天農穀 천농곡은 不飢穀 불기곡이요 地農穀 지농곡은 餓死穀 아사곡이요 天陽地陰 天寧 천양지음정녕커늘 鬼神陰陽不判 귀신음양불판힐가 天金剛 천금강과 地金剛 지금강이 陰陽兩端 음양양단길라있고 山金剛 산금강과 海金剛 해금강이 鬼神兩端 귀신양단길라거든 一心修道弓弓人 일심수도궁궁인들이 十字陰陽判端 십자음양판단하소

하늘 농사를 먼저 지은 후에 땅의 농사는 뒤에 지을 것이요. 하늘 농사로 지은 곡식은 굶주리지 않는 곡식이요. 땅 농사로


지은 곡식은 마지막엔 굶어서 죽는 곡식이요. 하늘은 양, 땅은 음이 틀림없거늘 여찌하여 귀와 신, 음과 양을 판단하지 못하는가? 하늘의 금강과 땅의 금강이 음양으로 갈라져 있고 산금강과 해금강이 귀와 신으로 갈라져 있거늘 일심으로 심승의 도를 수도(修道)하는 궁궁인(弓弓人)들이여! 십자(十字)에도 음과 양이 있음을 잘 판단하시오.

天地地鬼分明 천신지귀분명하고 男尊女卑分明 남존여비분명커늘 天地理氣 천지리기엇지하여 反覆稱號 반복칭호뜻을아노 神鬼 신귀라고아니하고 鬼神귀신이라 稱號칭호이요 外內 외내라고아니하고

지귀가 서로 싸우는 중에 혼돈할 때 천신이 지고 지귀가 이긴 까닭으로 승리자의 놀음으로 천지가 뒤집히니 천신은 어떻게 할 수 없어 지상권을 잃어버렸다네. 귀신 세상 되었으니 신귀라고 할 수 없고 남양 여음(男陽女陰) 분명하지만 음귀가 발동하는 세상이 된 고로 남자가 지고 여자가 이겨 권세를 빼앗았기 때문에 지귀가 승리하고 천신이 패배하여 양음이라 못하고 음양으로 되었고 남외(男外)와 여내(女內)가 분명하지만 내외(內外)라고 부르는 것일세.*

하늘은 양신(陽神)이며 땅은 음귀(陰鬼)임이 분명하고 남존(男尊)과 여비(女婢)가 분명하거늘 지천(地天)이 아니고 천지(天地)이며 기리(氣理)가 아니고 이기(理氣)임에도 칭호는 뒤집어서 부르는 뜻을 아는가? 신귀(神鬼)라고 아니하고 귀신(鬼神)이라 칭호하며 외내(外內)라고 아니하고 내외(內外)라고 어찌하는가? 천신과

內外 내외라고엇지하노 天地相爭混沌時 천지상쟁혼돈시에 天神負천신부이地鬼勝지귀승을 此然由 차연유로 因인히아서 勝利者 승리자의노름으로 天地反覆 천지반복힐일업서 地上權 지상권을일앗다네 鬼神世上 귀신세상되였으니 神鬼 신귀라고할수업고 男陽女陰分明 남양여음분명치만 陰鬼發動此世故 음귀발동차세고로 男負女勝奪權 남부여승탈권으로 鬼勝神負 귀승신부힐일업어 陽陰 양음이라못하고서 陰陽 음양으로되였으며 男外女內分明 남외여내분명치만

<div><div></div>승리신문</div>	1990.3.3 등록번호 다 - 0029
발행인 겸 편집인 김중만	
본지는 구세주(정도령, 미륵불)께서 말씀하신 사랑함이 실제록 죽지않는 원리(영생학)를 누구든지 쉽게 배우고 실천할 수 있도록 소개하여 질병과 죽음이 없는 개벽된 세상을 만들고 진정한 평화의 세계를 구현하는데 기여함을 목적으로 발행됩니다.	
경기도 부천시 소사구 안곡로 205번길 37 우 422-826	광고 및 구독신청 전화 032) 343-9985 FAX 032) 349-0202
홈페이지 www.victor.or.kr	
본지는 신문윤리강령 및 실천요강을 준수합니다.	